

日本農業気象学会2014年全国大会 公開シンポジウム

「北の農業は温暖化にどう向き合っているか？」

～北海道ブランド力の向上に向けて～

主催：日本農業気象学会

日時：2014年3月19日（水）15：00－17：30（予定）

会場：北海道大学学術交流会館（札幌市北区北8条西5丁目）

対象：学会員、農業関係者、行政関係者、市民など

講演題目

(1) 北海道から日本の米を～「ゆめぴりか」おいしさの秘密～

五十嵐 俊成（道総研上川農業試験場）

(2) 小麦生産は高温影響を受ける？～北海道は気象応答の最前線～

下田 星児（農研機構北海道農業研究センター）

(3) 十勝川西長いもの取組みと気象的技術の側面

藤岡 和博（JA 帯広かわにし）

コメンテーター：REFARM 北海道 東山哲智（東山農場） 大塚慎太郎（有限会社大塚農場）

司会：広田知良（農研機構北海道農業研究センター） 鮫島良次（北海道大学）

趣旨：

日本を代表する食料生産基地である北海道では、冬季積雪厳寒・夏季冷涼の厳しい寒冷気候下で農業が行われています。開拓以来、長い年月をかけて、北海道農業は短い生育期間や冷害を克服し、寒冷気候に適応した大規模農地での栽培体系を確立してきました。一方で、2013年秋に公表されたIPCC第5次報告書で示されているように、近年、地球温暖化は確実に進行しています。北海道でも、2010年には開拓以来初めて「高温による」深刻な不作を経験しただけでなく、以降直近の2013年まで高温の夏は4年連続しており、さらに冬についても道東地方の土壌凍結深の顕著な減少傾向が続くなど、これまでに経験のない温暖化の影響が農業に現れています。

このように温暖化が進行し、解決を要する課題が次々と現れる中、日本農業気象学会の役割の重要性は益々高まっています。本大会のホストである北海道支部は、この期待に答えるべく、2012年に支部60周年記念事業として「北海道の気象と農業（北海道新聞社刊）」を出版し、気象や農業における「北海道の今」の現状と課題、研究成果を多岐に渡って伝えているところです。

さて、北海道の米は、かつては“やっかいどう米”と揶揄されていましたが、いまや我が国トップクラスの高品質な品種がいくつも開発され、良質な米の供給地となるに至りました。国内生産量の約7割を占める北海道産小麦についても、多収の品種が開発されるとともに、これまで輸入に頼っていたパン用小麦でも安定生産が可能な高品質な品種が開発され、我が国の食料自給率の向上へ新たな道を開きました。また、十勝地方の長いものように、台湾や米国にも輸出され、海外に打って出られる高収益な作物に成長しているものもあります。これらの北海道農産物のブランド力の向上には、品種開発ばかりでなく、先進的な気象情報の活用や寒地の気象を巧みに活かした栽培管理方法の導入が貢献しています。これまで、お天気任せであった大規模土地利用型農業の現場でも、気象利用技術の進展が著しいことを、シンポジウムの企画者自身、企画立案を通じて日々、学んでいる次第です。

本シンポジウムは、北海道での土地利用型農業における気象に関係した情報利用・栽培技術の最前線の先進的な事例を、研究者や生産現場関係者から学び、さらに、北海道の若手気鋭の生産者をコメンテーターとして招き、研究と生産現場の双方向のやりとり、かつ未来志向の農業気象研究や対応策の議論を活発に行うことを目的に企画しました。研究者や生産者ばかりでなく、行政や市民の方々にも得るところが大きいシンポジウムになると確信しています。